ＳＮＯＷ ＲＯＳＥ～白銀の薔薇～

美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＮＯＷ　ＲＯＳＥ～白銀の薔薇～

【Ｎコード】
Ｎ８１６７Ｋ

【作者名】
美月

【あらすじ】
銀髪を三つ編みに束ね、深紅の口紅をしている事から
通称、白銀の薔薇＜スノーローズ＞と呼ばれている
彼女は暗殺組織【アサシン】のメンバーでいて
最強の暗殺者。

しかしそれも５年前までの話。

今では息子と二人で静かに暮らしている。

ある日、二人組の男が訪ねてきた。
この二人との出会いによって
スノーローズは再び暗殺者としての顔を取り戻す事になる。

episode 01 スノーローズ

悪夢を見た。

ここ最近いつも見る夢。

夫、ジェイクが殺される夢を…

ジェイクは5年前に何者かに殺された。
誰に殺されたのか…何故殺されたのか？
それはわからないが狙われた理由の一つ…

それは私が暗殺組織【アサシン】にいた為だ。
他にも暗殺組織は存在するが
アサシンは暗殺者を暗殺する組織でもある為
恨みを買い狙われる事も多かった。
これは同業者の中ではタブーとされている事。
私のせいでジェイクは死んだのだ。
愛する人を失った事で何もかもが嫌になり
生きている事にも疲れ果てていた。
…しかし、たった一つだけ救いがあった。
私はジェイクとの子を宿していた。
これをきっかけに組織を抜けて息子と二人で
ひそかに暮らす事を決めた。

組織にはある掟があり入ったら最後
死ぬまで抜ける事はできない。
途中で抜ける事など許されないのだ。
これがどう言う事か…そう、私は追われている。

裏切り者となった私を探し、見つけ、そして殺す。
かつていた組織もそれは例外ではない…
情報が漏れるのを防ぐためなら昔の仲間でも
ためらわず殺す…それがアサシン。

穏やかな暮らしを始めてから現在に至る。
息子は3つになっていた。
全てが過去とは違う生活…私は人生をやり直せると思っていた。
そう…まさにそんな時…
私達の暮らす家にある二人組がやって来た。

そしてこの日を境に私は再び闇の道を辿る事になる。

episode　01
～スノーローズ～

―テムルの街はずれ―

街から少し東に行くと小さな家がぽつんとある。

周りは森に囲まれてるし、テムルまでおよそ５００ｍ。
他に民家なんてない。
木に覆い隠されていて遠くからだと
家がそこにあるとは思えない私達の家。

そこへコンコンとノックのする音が聞こえた。
テムルの人？
まさかまた追っ手…？　　…いや違う。
今まで追っ手がノックをした事など一度もなかった。

私は警戒しながらも息子を二階のベッドへ運び
そして玄関の扉をゆっくりと開けた。

すると黄色いバンダナを撒いてる男と
筋肉質な身体の男が立っていた。

見たところ暗殺者とは思えない。
かといって街人でもない。
そんな事を考えている間に向こうから話しかけて来た。

「あんた…スノーローズだよな？」

「……その名前…何処で聞いた…？」

スノーローズ…それは私がアサシン時代に名乗っていた名前だった。
そして組織を抜けてから捨てた名前でもあった。
どうしてこいつらが…

バンダナの男がニヤリと笑みをもらしながら口を開く。

「やっぱりあんたがスノーローズなんだな。
思ったより全然若いじゃん」

私はドアを閉めようとした。

「あ、ま、まって！」

「……何？」

「へへ、知りたくないの？
どうしてあんたの名前を知ってるのか」

「……あんたら何者だ」

「まぁそれはさ、中に入ってからにしない？」

ただでさえ追っ手の事で悩まされているのに
その上、こんな変な連中と関わって悩み事を増やすのは御免だ。
しかしスノーローズと言う名前は同業者の間で
通っていた名前…一般人が知ってるはずはない…

いや…でも今の生活は壊したくはない。
気になりつつもそう思った私は再びドアを閉めながらこう言った。

「帰れ…二度と来るな」

「あ、ちょっ…おいって！」

この二年間追っ手からなんとか逃げ延びて来たんだ。
やっと普通に暮らせる事が出来たのに
それに…もうこれ以上大切な人を無くしたくはない。
その間にもドアの向こうから声は聞こえてくる。
この声はバンダナの隣にいた筋肉質の男か。

「スノーローズ、　あんた5年前に
旦那さん…亡くしてるよな…？

…俺達はその理由を知ってる」

そんな事。
私が暗殺組織にいたから…
アサシンに入ってから何十、何百と殺してきた。
その中に罪もない人を殺さなかったと言うと嘘になる。
色んな人間に恨まれていても仕方がない。
私が大切なものを奪った様に
私の大切なものが奪われたのだ。

「面倒事は嫌いなんだよ。

帰ってくれ」

「ふぅ……頑固だねぇ」

「仕方ないな、…ジェスティーやるか？」

「…だな☆」

ドアの隙間から一瞬ピカッと光ったのが見えた。
この感じ…まさか…！？
私は急いでドアを開けた。

「…お、　ベレック、やっと出て来たぜ」

「あんたら…それを何処で…」

使用者に様々な力を与える宝石セティス…
主に暗殺組織が所有している。
一般人には決して出回らないはずなのに…
どうしてこいつらが持ってる？
セティスその物単体ではなんの効果も得られない
セティスをはめ込めるブレスレットに
はめ込んで初めて効力を発する。
その使い方も合ってるし…
それらを見て私は戦闘体勢に入った。
こいつら…一般人とは違う。

私もブレスレットをつけセティスをはめ込む。宝石は紅い光を発した。

「あんたら組織の連中か？」

ブレスレットには回す部分があり
腕を掴んで回す様にそれを回すと発動される。
私はブレスレットを回した。
カチッと言う音と共にキュィィンと言う超音波の様な音が発せられた。
これが発動した合図だ。

「！？　消えた…」

私のセティスは身体能力を飛躍的に高める事の出来る効果【クイックスピード】
相手には消えた様に見え、私は相手の動きがスローモーションの様に見える。
直ぐさまバンダナの背後を取り腰の拳銃を奪って構える。

「な！？」

「さぁ…答えてもらおうか」

「あれがクイックスピードか…

さすがアサシンのセティスだな」

「答えろ。
何でセティスを持っている？
あんたらは何者なんだ？」

と私はブレスレットを逆に回す。
長時間発動し続けるとセティスが耐え切れなくなり
壊れてしまうからだ。
こうやってオンとオフを使い分けなければならない。

「だから教えてやるってさっきから言ってるだろ。
俺達は敵じゃねんだよ」

「わかった？　お姉さん」

「少しでもおかしな真似をしたら…
わかってるな…？」

―スノーローズの家―
リビングルーム

「それでジェイクは誰に殺されたんだ？」

「まぁまぁ待って。
まずは自己紹介から。　いい？
俺はジェスティー。
んでこっちの兄ちゃんがベレック」

ジェスティーにベレックか…
聞いた事ないな。やはり組織の人間じゃない。

「あんたら何者だ」

「俺達は……【紅き宝石（ティエリス）】と言うギルドに所属している」

「ティエリス？」

「今は俺達二人だけになっちまったが…
ジェイクもそこに入っていた」

「ジェイクが！？」

「あんた、　ジェイクには言って無かったんだろ？

自分が暗殺者だって
けどあいつは…知ってた」

ジェイクがギルドに…？
…知らなかった。
彼はごく一般的で普通な人だった。
仕事も病院で働いていたし
だから私が暗殺組織に入っている事も知らなかったはず…
こいつら私を騙そうとしているのか…？

「よく聞けスノーローズ。
あんたの旦那、ジェイクは…

俺達が殺した…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8167k/

ＳＮＯＷ ＲＯＳＥ～白銀の薔薇～

2010年10月11日23時09分発行